玉海集追加

付句下

へ部
1977
14 上

早稲田大學圖書
特 へ5 1977 14

玉海集追加付句巻下

雑之部

言に出ぬもあまりに約束

うつり行季の次第は面白や

いつも緑しき小田の恩

伊丹氏　宣紀

春は梅冬は雪見んに無あらて

同

いつの日にめぐりあはまや月の秋

あまりにも白きも一つまま申

摂州西宮　正則

まいりける人々かけたつと神の御

蒔絵にも見やるはいろえうつし

伊賀上野　未友

筆に心を残しはあふまでもいや

国沢は梅せさるに待の罰

大井氏　重次

忘るなと思ふもし月のわかつき

心や誘き旅に異見をと申なり

紀州高松氏　定吉

毒ほしらぬ心てこそや　右卜

術まことつねにきれこそ痛あり

久しく肩し閉も明きけり

君のあこぎ引いかり飛きりこと

儀屋たして　たゞ人ですし　仙菊

気つかりしきふめしうる人合ませれ

智者のよあそうる人はあやしき　岸本氏　秀林

ほつれは出の御きる気に乃く

居子ときえ見らる家の立会　大井氏　重次

時いくらわらし謀叛たくめ

万民のうらむしいうそ紀まるを　江戸住松　宗正

それくの役儀に家にやまとう

成人きれはあまふてさあり　大坂氏少人　生毅

蓑の世といふへ人の口くせか

このわしさよ懲のふきさよ　江戸呂北　幸吉

よそのそしりても恥ぬ老菴

いつまでも総領様を称ころ　定伝

一分つゝも金やたしなむ　大井氏 重次

料理する鶏の餌袋はしまゝ

たくひろのつゝけ山の陰　伊藤氏 利宣

婦人のあるは忘れくを花にて

あやうき鞠とかゝやく忍こさ　土肥氏 定利

みんなやくざ悲ことすゝて拔あそ

守る志くゝする玉やふらく

しりも世に療治はあやまりすくなし　光俊

みまりんしてま去者のゝ暇

醫者のみうしろやまたいゝせん　正信

ゆあみうらゝも氣やらかくさ

物あるとたくいいて産の伽　玄亀

若あるきく六神様信まやりくるりん

豆や山氣あり子供氣らくは　善入

みさけ志るそや礼をゝつめ

旅ちやら今日ハ沖より陸へむかひ　作者不知

行時ちられぬ花ひとさかり

手まくらに眉目あらそ顔そけ　伊藤氏　利直

より縁ハ君か旅をして

座頭に針をこそ求めて何　山城伏見住　卜琴

有世の中はかりハ縫ものそある

眼病に針をたてゝなをすらう　彦根岩瀬　正秀

是をはいハわらやまのかん

返されかるわやしき越えの末

馬のりてものこゝろ出ハ入　長之

やかうてねとやかねふるや

新鉾の角ハ肉をいたゝく　大井氏　主殿

去月の恋ハやむしくすり

双六の賽よハ重五の出かゝりて　越前福井住　笑種

いさかふそへハ坂東太郎の

志らへの勝をあやまちひかへつゝ　児玉氏　貞則

こゝのしまゐハ気と花盛

才蔵は喧嘩にいきを初るなり　南部杉本氏 梅心

死ところ仙んするところさき

葛飾の墨絵つゝてゑ取しや　利宣

ところハ是れところても納せん

まろとそのやらし法のうと　鼓吹 定利

札のあしを先は源りとの

絹様の形の絵抱をこう出て　可敬

律儀ありこゝ代りける禅の文　丹波隠居 正好

たちまちにあとをやけられ兄は

大礼用心とせぬは為しる

会門の病ハ日ころおもり来て　主紀

いつころもこゝろぬを画

跡縁のあたに花ハ梅るそうし　大津 光徳

北亀のゑうしも夜こゝ也ろう

四ゑ月まて会せし宗丸ゐき　村松氏 恵幸

またくもろれ紙きうて

いろ京ハ積りても猶　可敬

これ東路山とろ宮ゝしく

疱瘡のうんとる世親の悲しひて　下琴

人こハ乞ふ志んぐと志つまりて

志らしく賑とうろつ神　肥後熊本之住　宣純

療のうんとしもあるうてさ

恋やされ垣りて千代ぬめる文の傳　可敬

蚫ハいゝせくしも雨あきらの

禮ゝ云さ味半の免病見にまとろ　利宣

山さいのあるこにけろあろ

落ろめくれ気とそつきる　江州八幡住　知親

我らやまひて涼しやうよ

絶食の上に大煩さすきこみて　摂州西宮山崎氏　備敬

ねふ山氏けふし祝ぎ引して

おうらへつゝも出店の木地　利宣

月もしに煙れ出る程ふかくれ

腰のうちに杖山樵をさそはるゝ　伴氏 次頼

大勢こもりる城ハ志つまりしも　大井氏 素頼

山川にあふれ出る箸の数

城郷ハころしても心を取るあ　小川氏 忠真

志つし松のえにたつうゝ

村木ハ谷へしきりおこし

せめむりしぬるき城の要害　元政

せちあひてくむ三献あれは

雑兵に二丸をもあつけつゝ　可頼

ものつくしよ下谷の栄さ

幼なるやすゝ君をかしつきて　貞室

訴をおろし侍たて帯そひ　一雪

くるしと思ひきらぬ守護に

わしきは花てるからの世しき　未友

老松の陰ふしのちをぬらすま

味方よせくる大塔の宮　立真

沖ふ水いさしきまくまろん

傘ハたゞ一面に柄ゆかして　紀州熊野山氏　一重

みちのくの若立の杉の雪の峰山

いくのゐ居を山川て今日　羽州山形大原氏　忠親

縫目をよしつゝ綿る玉虫

唐破風の影を結ひし面さき　中山氏　梅室

かくれてハまうりてゆく里の石

用意してかけ車たいまつ　彰加之　定利

みりひまりしてころも袖の地

緒扇のつまんとふりし車の輪　梅室

そらひてらる一文字の大刀

糊あひもよ表の御縫をかけ　大井氏　主次

谷川おしきて山ろくの何の度

花のかしこしや箴士の笠　可歓

尺もとのわり橋より出て

流枝ハソよこうきぬ柱かな　越前福井住　箕柱

文殊にこそあふ人今宵てもてなし

のあるきしやうたれきしのこ　井里氏　朴之

月涼り

かゝとあくるうつ火のおも

まあゆゝつ六竿あのかるんへ　荒川氏　茲芸

ゐのりてきそうそあまの羽衣

壁横も　ゐのゝろうし　初の花　素宵

思ひもよらぬ夫婦にされて

宮まゐり泥のみちそくゝれる　圭紀

こゝの所にも御ほき人こそ

辻風の上からふきくる市の橋　不必

百細うつゝそろうてまさる飛

閑てきく六や小倉の色紙窓　利宜

おりゝぬ雛ありあふ坂の関

まけぬるや経のて鍵の六人舎　友静

痛氣なし人あらく人多くて
〻外菅原のよしむ官爵
吟味もしらる家の名悪

但州生田白海 龍之

貴之の言ふ川を渡志けめらん

彦根若林氏 正茂

志流め流しとわやりかん
感涙ハ云人の名にあそれ

村松氏 重孝

飛去見世の恋しくある名
粉荷きたりしを言ふ難き名れ

唐州佐久間氏 之数

文千の文字をおらえしめ
耳ちえに出そつハそ和哥の名

春香

天神まつりをもかうる
うつらく今まる哥の時をうつし

六共

祖師の仰ねちうられ去
法を請ハ東待ち風を似せるこを

春香

何ものを形ふしそきけ
昔光の実加の浮名のいろあしん

紀州木村氏 寅辰

たちけたまへや東寺西院仏
さめくさ蕗はよるる吉利か舟　可粒

切りのの外に出陽あらう
ころは風はん子孔凡あしの凡　樋口氏　芸英

蝶や飛ちらして雨切りなから
中ほとほと毛の巣を鹿網なくて　鼓雪

かろきほとそけしるし杉ね
巣をとらひて手をそつつは裁かり　一井氏　全

我ならてきく人やこそしぬ
鯨の糸ひらいてよりる門のうち　大井氏　重次

慈悲の心をとらまする
飼鳥のくるしむ籠の口をあけて　加州金沢　園元

先ひ子れり来をやとらぬらん
巣をとられぬる蜂の後さ　京　重永

かつき命はなてあるや川のうち
山椒魚く摺りてきらふ　江州　幸方

いく度よりあつけるかゝれ
法さくさりや杵のつき合う　長之

くいし物を案しくらすれ
出はすぬ境目のさゝかむすひ　桜井西宮 樹僊

三河とのつくもえしふ書
座敷りの夕のさきる湯をして　素堂

武ある人もなかりけるし
ちの勢ちゝ自身あつくる帛山　可粒

意と我屋もさらく世中
新酒のをもむる穣穀あふれて　同

うく人ゝあやなとも鳴る人なし
平閑白と呼る附忠　同

ちらりやうなしもこなる落葉
おもしめる源太が澄がきらりて　大井氏 主次

今のさ厳法のいうとられめる
古風りの證のいゑくと結ふてをも　丹波山家 心静

折の影ちらくもる水鏡

甲きて武者舟にのりこし　利直

うろうろとのる舟も中

藤縄ゟ力もおちぬ人なし　定利

かくとてそこ一門の中

敦盛のよそひすき沖の舟　播州西宮　主女

舟よりのまへも友を割ける

雑兵は死せるは落るる　羽州山形　未覚

いまさらとくいのひじ旅人

為筋よいきうらとそ高札かん　犬井　重次

吉さ河のあやで鉄炮あまへきそ

蹬よしつき高よのくしみ　宣純

抱ねさあひは行とせうやう

梶原が詮で辯の見ことらて　光之

うちたち枝の時そらくれ

筆にとやうて城まで霧し　正信

手にあまりぬる蔦やくせ蔦　可粋

薪高等の用意まつりし

城からハ松をお山とうしろまて　同

見し秋の無常の声ハあはれなり

乃とつ〳〵たしかる旅人

うか出世中をかりし追出て　定利

うつり行世ハ本堂とみるひまて

又敷の浦とかれ鯨釣　恕府

又みしらぬ紙の生死

たらひに毎楼つゝへ入られ　筑後柳川大隅　友連

岩穴のそこ門よりは道入てゝも

新田に何る苗すけるハ事し　丹後葉谷　山井

名字名家ときこえんとそ以ふ

よ縁せて八道を雅ゟ忘れうて　羽州大楯　定之

遠くを以いふとしてふかみとなれん

名のるそこらけハ旅たゝ組　中島氏　秋道

ゆきわれまふハ慣らしこあり
起てあるこかくとく鍬かな　但州生野小川氏　章堂

膝頭の力もまゝくさかりてつよし
弓（？）ゆく[illegible]しさとめり　水戸山縣　不競

かしこきあふま聖あるまゝす
従利伽羅の人ハ鉄ハ西寅參て　可則

洗毋さらくハ人[illegible]
うしろ[illegible]寒をやまれく也　大井氏　立次

まかくひあるハおれりん数あけ
大ねハさいとうてゆる勝軍　一守

まきりしてのむ道ハいくめり
軍の首途いさふ武士　こうの山　春雲

川つれつてもろてきふ鳥
兄弟の紀付の伝まつされて　定利

うつの物ハ花味もろてまれ
天柄ハ似ぬ軍場のうてう忘　西宮水野氏　清彩

あしめくらくと六まき一つりほか
まつくにさのむ係鞍の文つくひ
歌ぬの一らぶすよめてつまりて
松本氏 光宣
ひそかにこしむ綜鞍あやしさ
めくりありれや歌と多和申
宇都宮大輔氏 忠升
生涌と申て大膳川るし
ようひとしと申と祓つらへ多
池上氏 山升
京らい猿藉物とのへて
真興

須香にくくてらい申志
百日大と射ららし矢さけなれ
はなのめつも武蔵し
登野之 去坡
河海のよくの都もめし出れ
組にかられときつきひきいれ
真興
小音に稽古にあつらゆ
てらさて君らへつりめくれ
梵宣
梓弓あへと射ゑむうしや
星井 退安

夜ゝと出て地蔵山にのり
是非もなくきくとてんにかゝり　一夢

月蝕り

自害とするハむつかしか
述つもる詫としたをひらし　定吉

君か為なきの風の葉の月
そしるよのゝやゆゝしなりしる　江州佐和山　宗正

せん兵のちらんぞいらてたまるへき

夜陰と静かに舞てたゝる
ゆるまにゆるすゝそめ袖　生敬

あるひハ膝を机のよふして
撰ミ歌ミのわのつらさよ　加賀国正国氏　正倫

つゝ枝ゝ餅花あらたまりて
お後の理非をさけるてある　伊氏　資次

漢字とハ小知恵ありても読ミ難
短気の火ハとほしと述まて　一甫

医者どころあいれぬくすり也　李雪

つゝんとてよる油火のかげ　忠真

綱目と取字の寫わかしらき

ゆくとしあてころや油色　利宣

文字しる説を申すも寫まれ

君の目きゝに潤ふるしや　大井氏 主次

文字をぶらかるしきなし

小らま小気つとらうてひく

及第とのさため叙多や深くらん　同

すんの名も月忘れはかなし

称しふ便失のあさかり栄まる　一甫

とらわきて示めりては面白し

あゆまり袖は蹴鞠の云　西鷺 三周

引ぬりさきて留やらのむ

納豆の家しすれるは野の面　未交

宿とやあ世俗いらふ人ぞ下心

いつや露は添んとる虫の声　岸
世にひるのこされたる蚊聲
螢ゆれとい露行ともけつ之　白
松風や虫のさゝめきなく涙
耳きくるしとまるといふ詞　貞
あきれて情ふかきもめをとり
笛と竹きゝあはす翠のゆうし　眞
蓮とのみふかのきむ哉る
とかの世に武者もすてやりけり　可頼
あらゝらうくらくるへれあし
程ゝや酒手よつかそ舞の袖　利宣
忍びさしや忍ひさうに住みし
下前のかりてのちるこ味線　住吉二宮松葉　一双
天拜のりにとそられもらへのそ
咲ては花めうにさ味線の音　尚的
きそしまあらぬ忍ふくさの

春めてこゝろふかきところ之し　谷町住西井 有如

夕山路とはらゝふ

紫かりなかえ志ちまつて　肥後熊本住長尾 正備

ゐせゐ真の花やぬるくそ

やまやまそ深生山家のりの関　山井

さしけ出たむちかる宮の前

傘さゝぬ　まさる下ちらち　沖口氏 尚枕

桜東まち切しハちまくね少なめ　重石

こゝ地の山でふとしかりく

てゝ口やと座らぬ花かつまもし　摂州西宮 正則

亀謡の結そまくとハすそめる

但遠きハ出済をわしさ　極の床　正成

人くらひおたとらへかけあつ

かんりらおハなや啼し鳥部山　素友

あそれ来日り帆しそ食

人国り行宮山急りのさかし　可也

立ゆくもしやせめて一念仏

かりし川風や同扇やまうし　同

松にふ源氏の旅やうけるん

年後まてそ小島殿　山井

くつてみところ川上の宗

年後の松は比りかりけり　可精

人笑かれはのとけくもなし

松風の元夫は雪ふりさし候　東雲

宮すてみかいゆそおぼへつさい　西辰

たて男松のかはてやすむし

和田一見ハ奥州のむかの　摂州西宮住　京次

かすれさうける岩の白雲

富士山ともゑ縁の白や志かなん　敦賀住　惠紀

ちつ清は北国にながれて

富士山を振り四尺のうつら

吹はわき息れなきこしかり　梅宝

行燈風呂にいせの遊参ふこうて　長水
かゝりといつる灯の花
波ふくの秋は碁石を打鳴し　悠知
いくまもとらう経論の旅は果
鼓のいるのつる　そうかくい　利宣
田丁とらすてゆくうやつるひ
云ふ秋の里やころのおこるらん　一井氏 久重
こゝの毎無雅のかやすゞるん

泉界は鋤はあをたけきとて　住可
沟濤もきみの名やあまぬ九
一の谷より出郷の松に塚　言水 冷元
引てくらしくよ流し写信
一の谷となれは波うちきいまし　泰雪
秋のあれはあかつかなり
船の中ゆう錦してゐる石の曜　定利
武蔵の猿公人もあゝ蘩の上

・清須にかよふ船路の高所　　梅室
あつくるしくも寄る亀の声
風わたる伊豫地の秋の旅経　　同
さらにひらく浪を狩なめすらん　　羽州山形寄留　正次
・淡路や小船の苫は菊の露
冬のくるまに田舎よらう
西まても須磨の浦の石をそろへ　　大井氏　喜次
うつくしき床屋の窓の月

西の海に佛の浮めかくらくへ　　利宜
冬を飼ふてりうんこうくらし
堀通へさしめかはさらすら池の庵　　未發
・玉あへてぬあいきしる鏡
見渡すふ洲濱にいさむ鳥の　　江戸余堂　秀長
流れし船さんへ何しかし事の
・桜柳は中ぞらくれ紅葉にけ　　可敬
すまやみ梁の梅の緑氏

ありし夜の畳へらさぬふとんかな
たてゝせんなや燈明の數
貧女かあまき長者の万灯
いそてくらしく身をしく人説の物　攝州伊丹住
吉仲
あるもしはあみかくしてくり　卜琴
はろそ出たちつき身のあやしや
人形手をこうまえのしぬ　石蘇
ちまのはしちし茶晒ん

乞食は錢とらしまる神まゐり　梅室
坊といて後生一遍
ちまいまの國まで ぜいの神　丹波山家
小静
年寄ても仏のしい談義し
是非といくとめん〜年よ　古道
麻さらつくと命まつ
錄の皇てとれしき人とく　大井氏
宣次
いそて極楽世界へ也

宝殿の後のおりから能おりて　来亭

篝てらして舞やつきぬる

高砂の能の面はたけなかう　摂州西宮居民　杏正

三人か棒ありのしくさらいて

志てときつれし庭おの能　一甫

袖まくりてたいくしれ

立ちおくくみえめうは鍛ゐ

白水の月をかさしたる　呂入

日柳といふとてはしるさらん　可秋

春によって船とかへるらん

人中に浦島子おそろれて　同

多りやそろなりせのらん

うしわれ言てたしおひかれて

えそそらまれ人も宮川　定利

夜のしらしみ鉢は仰とるふ

かめさはえさるは浅瓶中川て　柳下也

とゝはあふてとはいふ人のなし
蓬莱の名や名のとられん　同
ちりきりれしも人の名ちかし
家まいよその雪まて云て　同
わしかふすま井筒の端
時人の石ふ仁の名ありて　羽州山形村上氏　馬口
月夜の月よ門跡のうく
ま鶴も信色てあるいはさめて　江州八幡　言武

猿の名かしつまふつの判
借銭さするとみてこそ一葉ホ　正信
あやしくも太夫や雲にのりけん
つけいふしくかるめいかう　同
うしめろしく朝の秋多る
海ちうて不首の玉さ江あけて　退安
堀江のや月の賦詩をなんて
杭まうるかやまて夜網　荒川氏　石共

忍してしのふ恋のうき身の
捨舟し暮ゆく空にかへり合　何負
あつさ限ぬるとしるさまさまに
酒のみて礼服遣ひとらし　大井氏 重次
身祥けはけ双六とうり
まかりにも紀の筐にはす公人　長之
名将の祖先のたくし笑第一
まからて新しくき井のり　同

こかれしはあやしくもかたいは
姫君は鐘にかゝれやはらかし中　右卜
中将はのゝめかりの今様や
菫の糸はよ姫のからとの　可轍
くらのかもちんとうとかう
浦里はよつきりねやなかるらん　少人 生敬
月次あり
居ちとは宿やまれ但せとて

梅の花や汁のまさして富すらん　梅字

ころもしはすりたすらん小袖　卜琴

わするのまて いりしめ絵人

おかれしを侍をえれうる○

山まちの河法きくも招ろう　三呆　楊蔵

まうつまうる 堀いふ井し

菓子のて富まつ紀せ霧え衣し　芸粋広氏　玄椒

給人のまちのもいはふ穴しや

灸すへんちらいまお疲せよ　大坂堀山氏　法燕

ちまる焼つり目居をする

病人は捨るめくされ教なまり　宗方

よられめ中ららまき帰のもし

厚き紙をやいよの二重さらるよ　利當

秋の汲ふ鉄おもめとえ汲なつ

うれやいとふの鳥は子は峰　可楽

むすめのとうせもちて室めらん

二番ありちよとしめ奴六　同

申待ハ鳥一聲をききとて　同

粉くさきうえてちるむかひ

またて祢らくらかし猫の聲　杉本氏 未及

月ならひとんやひらりん

弓明のくし餌よこうる小猫　作若知

風呂あくに名ハ流されん

わか志の學あつらるを射ることひ　同

かな大こゝろこゝろかたらう

能くられハくつろくそうけ　貞室

結ふとられてたらら首月

みけて出るのゆきの澄のきり　同

甲の縁をや月もしめまで

ちる松つあふのひつくら秋すゑ　同

引物かくれ日影のかゝるん

やわ良也清掃りますわれ　同

仏まつりはやき成の寺

あかりたてひて付さふくめん　同

小かしハまかの油やかりん

うけめ多賀の小袖まさ縫く　同

うれてしそ水ほ人まさふ安

茶釜ハ徒然うせて侍らくし　同

茶亭のこみてぬすみ宮し

うきみの思ひやこひいさらん　同

太の庭にうへし岩と松山

文字とかくれ石のわらうこと　同

賀之部

国ハ文下ともをうれの仁世

国なもうにまある久代　六象　沢元

あやうう神よ年みらの舗

いろ/\は手をたのむ錦のけ　小川氏 由真

青柳を馬ゑしめるたのしさよ

おもうけつく　敵ある生　貞室

誹諧の集めハ永正の比志那弥三郎

範重といふもの近江国にして紡く

摂津国尼崎ニ住し晩年ニおよひ

京ニ上り隠閑戸の侘のほとりに

閑居せし処哉を京譜を清めし

大筑波といふ書を作りて世に

さし給ふうちにも我か今按を
まてあるまし支りとてかく稽古して
我師松永氏貞徳先生あつまり
こゝろを悟りしはまことにもしか
ともの後を継し中に親重重頼と
此道の先達にて此門にありし天文
年中より以来の発句付句を

於はく一集となして師に記へ
まかせし集の名つけむ所を
おりてよろしうおもむきさらむさら
しをこ三字較りて異せしかは点
止ちもやかて思ひ給ふし犬筑波の子
くさをたのみてつきて犬子集と
其名をのこしめ二巻とあるへし

宗鑑筆をとりて親重へをくられしよ
ろしく勢州山田の守武とさしめ
神部の句を集むる事にて二千
句余もくるしく成功判師の
山も跡をしれしさ彼草案に
宗鑑の小新撰せしに親止めして
一千句の百韻を集め字数を集し

題して板行せしは先輩也親重
か句を七十五句かの其外を百五
十余句書入ぬ親重これを増補し
名のれ浮世に此輩の句数を作り
太平集のあり句ともくみ彼
是我か六百余句の句続を以太子
山は前後混乱あれと親に句を

ふるのまし百五十余首は書を
り自ら信じて三百句の内を撰し
一村といふものゝ撰出させて開
板せしあるなり二百句選を
いろいろ童蒙の集を作り
類は色々あるを板を勘しく
近かを編むここに貝原来第に

東谷道節といふ者ありし時に
一集を編みて澄師を頼めて
同門人の句をもあつめ席
誹諧と号し山本西武と坐し
させいろいろと世を経て文
鷹山集と名つけて誹諧[illegible]
より毎[illegible]の句を[illegible]

堂あり影ゆしあらて負笈
老のまとまり玉香集とそ號之
とすとて圖くらる白桜とし
のかりて人道と称しぬ法集寺よ
しと桶わさしき寺その寺とあ
古くんとけるとそへくうう
と称徐よめしせ宝鏡寺かん

後も寺宮集と桜次せしもとうき年月
あかあ御風に経冊を積しぬ
備しのにけらは應をあとしとはるい
とれとは思師の遺言をむしくに
本のに二きまうしく桜につき
あまり桜木よ影を仰きて師の
影あまり倫へ仰うあまたは鏡と

續御し　頌出此撰にいさゝかもくさ
不いふし思ひ歎き追加せられし
歌ものは玉海にこそ殘りたれ者は
思ひしかともよ撰の述にはかられ
慶安あれあらいかにも果して
玉海のさ撰し玉葉集あるあ
こゝかしこなとことに續世園抄

に侍すへきよしも撰ひ合せてあまたゝひ
清書し侍る志あり頌年
世にある人々に渡る集既に三十部に
餘り四十部に及ひ眠あまたありく
少雅しを窺ふに拾遺加ゆへし
續し發句半に續きて類せり
りしけれとあらはあれこの追加

思ひ立侍しハ十七歳あまりの事
何ら世よ道也三十余の集まて
世をたいらに桜られかり桜たり
あ桜くして見を深く一ふしの
深き侍らハたやすくも追加よ
聖のし給ふの嘆をあさなら
にも人の気にならす羅ら

下の後はさらに此ことありと致よ
古歌をして神の思ひ顔をある
伺しらゆりけれは定しかるさしも
誹諧ら物えにて思ひあれく多く
の桜ちよの心をつくし桜にし
て世をつ世しくきぬ
ふく追加をあらぬい人のつきを

禄婦の人のうけくとくらへまいらせて
なることおもふらんこの御代かし
さらに古今集を家の集とも
あかしきおもひ定めなれる心あるやう
取りよりまさる後撰の集を
これを撰みて風のことの
なかはたえたる拾遺集などの

多くの集とうちあつめつ遺葉の
類をくらへ後々のためしみる
ことや頼むによる好音妙句
あつめてこそ先代をあつめて後拾
うちには代々の歌人と詠みし御
撰へときに御代々の御
時代々歌とや此拾遺の集かね撰なり

ゆくゑ道を修むつゝ軍同行して
ていゑへりけ況様にもつてありて
京より田舎よりてあまた行人を
つかはされ給ふくに扇をむかし
霧し是宰をも領も其にや
集まりの奥に千兵によるも月
なりけりすゑの細かゝわさ

千人して高念丁人あまたして
銘む化人も一人もなくけり
思ふあそん諸々む様あり咲の
うけき申人作若そうわくうらそ
まうすらいふいとかしこき物をう
あまて様う代と為集あまうしも
執しあふゆへていふむいふ玉の揃

ことに叙けるに 鳥しきりのこと
くさゝハ絵れと 好来のさまとの
当世俳諧の 手本となるへし
崑山 玉海 集の後ハ 尾張集 等
犬子 狗人見袋 塵集 鷹筑波集
牛飼 口真似草 物忘草 新犬筑波
集 拾玉集 鉋屑 路艸集 捨子集
鋸屑 続子立 早梅集 懐子 思出草
鄙諺集 埋草 木玉集 落穂集 藤
集 続風草 佐夜中山 風俗集 旅枕集
峯雲集 耳無草 奉納集 遠近集
此外私の句帖に 書付あまた
古集の中の句をこゝにしるし
此外伝候書物ハ千句百句の撰集

楽みにそれと 物とかくもして思ふと
ねかはくは筆にまかせん見ん人のなさけを
使ひしてやハらけ給ハし老眼と
たらハしして 近分のうらみ社
未たハ深き猶しも世をへいと
いとも相きものまては猶すめし
如詠草の あやしく閉らし老

をさへ迄ましかなまとれは鏡の
科をもさかなれんか 但錦集よ
猪むし こゝろおもふ
[illegible]律[illegible]遊[illegible]書
[illegible]頼[illegible]
[illegible]
[illegible]

古今集をえらみ給ひし時これ
万葉集にいらぬ歌をとりて
入し様に論しまじへられさりけれ
すなはち歌ことにあらし此万葉の
歌のよみかたの文ハ古今にあり
此様の歌ハ其集のかたちにさせん
此て 万葉の歌は 御のごとく候

かつ字新古今集ハみかん御代二
集られしを此れにてこの巻を
さらさへと寄せ申給ふ候し
一ワハさ備くあるしと申り一首人の
んなとあらし世の歌の著ハ為に世にかへ
思し古今集よりくだしきハ人の
んなくれてしたる今に新古今集

さゝ白門をはなれし侍れ多羅も
西律のし先達のすゝめにまかせ
て及ひ兄を定る関人料とならん
ことをへこれを

寛文七歳丁未晩秋下浣日

一嚢軒

貞室

洛陽東六条

平井氏刊之